

43年度

松本

個人山行報告

(但し 十月末日締り)

すべて素晴らしが、た。ズクがないように思
われるがもし山なつが、頂上行きをおきらめ
たのも良かったと思つてゐる。いつても行け
るから。も。とゆくの一年生と行きたか。た

以上(照井)

久し振り、本当に久し振りに山に行く事と
なつた。浮き荷がやけに肩に食い込む。唐檜
の朝が目にしみた。(斎藤)

この前の新入右宿の事があり、照井と斎藤
のさそひにゆり、不安と勇気をもつて男らし
く出発。そろそろ几の事も照井がやつてく
誠にありがたく思つています。生まれて初め
ての山で、靴ズレもどく、斎藤と照井に迷惑
のかけようでした。あの後縦道の枚木の灯
は忘れられませんが、雨具を忘れたのは非常に
昏を思はせました。これからの山行はこの存
のようにします。とにかく楽しい山行でした
7.35でルートを通達したと気づきました。暗のり
ダの判断には良心させられました。夜、暗
い時のルート取り方にはも、と勉強の余地
があるように思ひます。以上(間瀬)

槍ヶ岳 北鎌尾根 槍沢 常念乗越

期間 5月23〜26
メンバー L佐藤正敏(AR) 笠原敬一(Ken)

23日 朝一台に乗り遅れた。葛にて朝食を
食ひ、今にも雨の降りそうなかを出発。湯ま
でくると雲がいつの間にかなくなつてま
くの快晴。高嵐山の稜線が残雪で純白に輝い
まいるのが印象的だった。高瀬の谷は明るく
また人里離れた感じがした。湯俣からは水俣
川のくすれかゝつた道を行く。なんとなく
これからやることの闘志がなにかで気が高ぶ
つてきた。千天出合のおろく小屋に泊まる。
夕食は予想外に口に入らない。とても良く腹れ
た。

(松本11:43〜大町7:55〜湯沢8:30〜9:00)
湯10:45〜湯俣13:20〜千天出合14:40
昼寝もした。就寝19:00)

24日 快晴 朝寝坊 予定より一時間遅れ
る。天上沢を少し行くとすぐ雪渓があり、オ
三平橋は橋の代りに斜めに丸太がかけあつ
た。渡った所が取付を足まは途中岩を混じ
えにかつりの急登。しかし、踏跡はバツテリ
バルトをまらかえることもあるまい。アツミ
もない。足から稜線をいく。登り下りを以外と
疲れる。所々雪田がある。

付並の天上天側をまく所が以外と口でらし
 く見えたので、アイゼンをつけザイルを出し
 に。トピツチを雪の斜面をトラバースし雪面
 に出っぱった岳稜にビレイ。2ピツチ目さら
 にトラバースし急ガルンゼを登ると段の支稜
 に出る。こゝをザイルをじまう。こゝからは
 雪と岩が変る／＼出まきま、たゞ体力を使う
 だけだつた。北鎌沢のゴルに下り、雪溪から
 いくらかアツシニまじりの雪の斜面を一気に
 登ると天狗の腰掛であつた。時間がいよいよ
 あるし天候の心配もあるのぞ少しもかせぎ
 だかつたが、良いビバーク地だ。下ろすと疲労
 を感じ、こゝを泊ることに決めた。天気図を
 とるとまだ明日、明後日はもちろさう。また日
 りの山々が薄色に白く広がる様はともも素晴
 しい。夜は岩の間から星空をながめて眠ら
 だ。

(起床4時) 天出合を5時25分、オ三吊橋を5時45分、
 P₁P₂のゴルを5時30分、P₃ザイル使用10時15分、
 P₄10分、北鎌沢ゴル12時40分、P₅天狗の腰掛15時30分

25日 快晴トクモリ 朝やはり遅れ、出糞
 牝標の手前のピークを干又天側をからむよう
 に登ったが、最後がかりの雪壁になつた。お
 り、らよと短い所だがキビシかつた。雪は
 しまつてより、アイゼンが良くきく。牝標の
 登りには念のためザイルを使つた。後稜通し
 になんぞく登れた。牝標に立つと目ぼしいピ
 ークは槍だけ。その大槍がかり高く遠くに

見えた。北は白馬まで見える。牝標からは雪
 稜が多い。山が岩峰は干又沢のうらなつた
 雪面をまく。アイゼンがきくも良くきく。岩
 峰の登りは雪、南の下りは岩と雪。雪は
 ばかりりめ、たが、たゞ足をうまく運ぶだけ
 をそれ程きびしくはない。北鎌平へや、と着
 き、いよいよ鎌の登りだ。見ためにキビシク
 見え、たがそれ程でも牙かつた。最初雪稜通し
 に其部とでもいう所に行く。こゝからは岩と
 雪のミックラス。雪がくま、まきまいるので
 スリッパの可能性がある。そのまゝ、ノーザイ
 る雪へきと岩カールンゼと登り、迷路のような
 登り方をした後、もうどほこらの裏に出た。
 ピークを一休み。下りにアイゼンをつめ、いたの
 ん途中雪の部分、佐藤が下りたばかりのカツラ
 ングをしながらはり、たが、槍の肩を雪
 もどき南岳横尾尾根はやめにし、槍沢をシ
 リセードで下る。といつても雪がまにやめら
 かく、あまりよくすべらなかつた。一の俣冬
 期小屋に泊る。のんびり料理をし、たき火を
 した。

(起床4時) 天狗の腰掛を5時25分、牝標を5時45分、
 北鎌平11時45分、槍ヶ岳12時40分、一の俣15時30分、
 の俣16時)

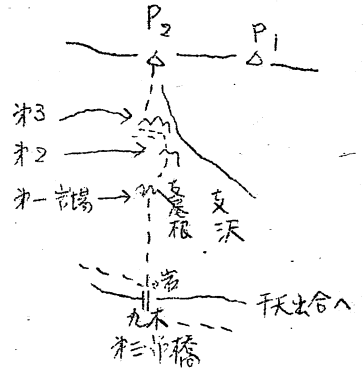
26日 晴トガストクモリ 午後、くり出糞、
 一の俣をつめて途中橋がすくまり、時間をもく
 ず。二俣前から森林帯にかりの残雪が残り
 雪の上を行く。途中、道をまらば、東天井の



（起床 11:00 出発 11:30）
 縦走路 13:35 学念乗越 14:20 14:30 烏川橋バス
 停 17:25 17:52 柏や町 18:16 18:26 18:35 松本 18:45

カールに出ました。これはまあ、たか
 ゆるんでにせいか出るまが気が付か
 どのま、学念乗越まがつかしの道を歩
 越むひと休み。ガスが出てかすり寒
 沢を一気にグリセードで下る。それか
 道も近づいた頃、つり師の車にのせ
 らった。バス停でしばらく待った。

天狗の腰掛のりの
 ステップ
 (ピクニックの呼び名に注意)



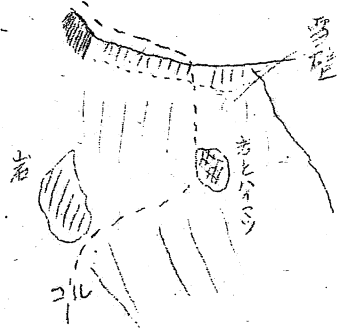
杉三橋 川 P2 まで

3 2 1 0
 2 2 2 2
 P 3 2 1

40m 雪のルンゼ状の所より岩の上へ
 40m 岩稜 あまり傾斜は少ない
 40m 雪稜 大石や岩の上になる
 さほど急がない雪面以外と長い



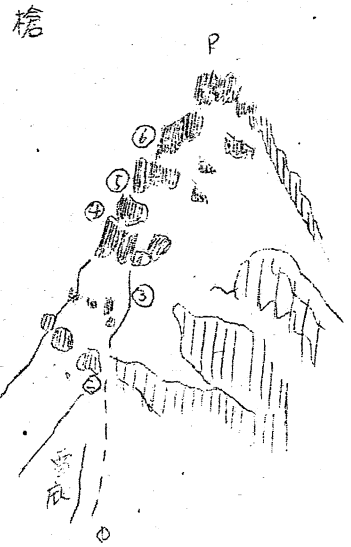
天狗の腰掛より独標



独標を越え手前のピークへの登り

- ① ② 雪の斜面を登る
- ③ ④ 岩を乗り越えて再び雪の急斜面
- ⑤ ⑥ 岩の内の雪の斜面の岩を登り大石や岩
- 壁の下を左へトラバース
- ④ ⑤ ルンゼがある クラックの深い。長岩
- を登る
- ⑤ ⑥ またらまっとした雪の斜面あり 6の
- 所に岩にうめこんだ碑がある
- ⑥ ⑦ Pにたつとした岩を登るとピークに出る

(Ken 記)



残雪期の鹿島槍ヶ岳山行

期日 6月1日〜2日

メンバー 吉野英夫 駒井浩 小杉昭夫

栗田昭夫 市野和雄

5月31日 長野の先輩が松本へ来られて、

5人は部屋に泊まり明朝3時30に起きる準備を
作って出発する予定であった。

6月1日 目を覚まして時計を見るとすでに

4時15分 しまつた寝すごした。朝食を作
るのほやめずぐ出発 4時とはいえ、すでに
5時10分に駅に着き、そばで腹こしらえをし

た。大町からバスで30分位ゆられ、鹿島部隊に
着いた。計画ではB社の西俣出合まで4時間
の予定である。トツプは小杉さん、なか

い、ペースを歩いてまづは1ピッチ、スビッチ
目打たん、早くなる、もうだめだ、ゆっく

り歩いてくれ、とどなりたくなる。栗田も遅
れがみである。するとまもなく視界が開けた。

出合のようである。しかしまだ2ピッチしか
歩いてない。西俣出合と聞えなかった。

吉野 駒井西先輩はすぐにテニ場をくわしに
行かれた。北俣本谷から流れる水を顔に洗い

水をゴクリとのみ、まき帰った感じだ

雪は相当のこもり、9、10頃には台地の土

にテントをきれいに張り終った。

朝食のラーメンを作ることにした。

11:45 北俣本谷の偵察をかねて雪上訓練
に出発。グリセードと滑落停止の練習。帰り

に山びこのよくきこえる台地に出た。駒井さ
んのヨーテルがこぼします。

「ヨロロエター、ヨロロエター、ヨロロエター」
いい感じだ。その後びびい、栗田のさげび

声である。

「ガオー、ギャオー、ガオー」
雪溪の上を走って下って、その日は終り

残った。4:30起床、満天の星がきれい
だった。4:30出発、昨日来北俣本谷だと

思った。4:30出発、昨日来北俣本谷だと
思った。4:30起床、満天の星がきれい

だった。4:30出発、昨日来北俣本谷だと
思った。4:30起床、満天の星がきれい

だった。4:30出発、昨日来北俣本谷だと
思った。4:30起床、満天の星がきれい

だった。4:30出発、昨日来北俣本谷だと
思った。4:30起床、満天の星がきれい

だった。4:30出発、昨日来北俣本谷だと
思った。4:30起床、満天の星がきれい

だった。4:30出発、昨日来北俣本谷だと
思った。4:30起床、満天の星がきれい

だった。4:30出発、昨日来北俣本谷だと
思った。4:30起床、満天の星がきれい

だった。4:30出発、昨日来北俣本谷だと
思った。4:30起床、満天の星がきれい

だった。4:30出発、昨日来北俣本谷だと
思った。4:30起床、満天の星がきれい

だった。4:30出発、昨日来北俣本谷だと
思った。4:30起床、満天の星がきれい

だった。4:30出発、昨日来北俣本谷だと
思った。4:30起床、満天の星がきれい

だった。4:30出発、昨日来北俣本谷だと
思った。4:30起床、満天の星がきれい

足持は行先とも言えず、日下九方と云う聲さる
 分下りマニい、かこはひきこえりクリセル
 ドを始る。最新は二階が、たグリセルドも時
 間がたつと楽しくする。落石が落ちまくる。
 グリセルドがききなく、ふから木をひらつ
 マテンバズにききや。た。2時間くらいいテ
 ンバズ休んぬ撤収。山雨がふってきた。大谷
 原が近づいた時は雨雲と競争。大谷原の飯場
 へと近づいた。頭面にザンと雨が降ってきた。
 栗田のサニマタはものすごい。足はま、たぐ
 脚前にはいる。鹿島部落を狩野さんの家を訪
 問して名前を懐面に書いてきた。新人合宿の
 ときスナリ山行とらがい個人山行はたいはん有
 る。表すであ。た

奥又白谷山行

(市野記)

日程 5月30日 56.2

参加 山田和彦 (A.B)

松尾武入 (B)

新谷剛

佐藤正敏

5/30 ①

松尾氏が大阪より来松。連休には空いて
 いたのに急におソイメンバー一人がこの精
 蔵バーテイに入る事だ。た。30日午前中松

尾氏と小生二人で山へ。ヘルと尾は毎昔時代
 影が信じてらぬ。もうな夜夜がブニブニ高級品
 を買ひて。新谷氏が寝た。うしろの日は明神
 が入り。人用テントを張り。更う存分身体を
 伸しく。オヤスミナサイ。

5/31 ②

明けくび。マカウ。のんびりと出発。霧
 を渡して。対岸を歩き下又白の出合。とめ
 た。結局。荷物や雪を考えた。松高ルンゼを登る。
 奥又白の押出しは雪で非常に荒れ。いで昨年の
 名残りはひか。た。通過にはスキーを捨ててい
 る。人かいろいろと苦勞されていまして。ルニ
 せは雪が着いていく。一時30分。池に抜けた。
 O.白の人達の体カには。唯敬服。現役オニ線マ
 ある。けすの。之。生。として。強く反省致しました。
 池は凍つたり。湯か。た。が。ミニ。から。戻。東。屋。は
 どの。道。カ。と。夫。に。ロ。マン。カ。感。い。ら。れ。く。大。好。き。な。と
 ころ。た。山。田。氏。と。新。谷。氏。は。早。速。ス。キ。ー。を。取。出。し
 て。お。い。た。山。田。氏。は。実。に。美。しい。シ。ョ。プ。ル。を
 パ。ラ。レ。ル。で。描。い。て。く。れ。た。新。谷。氏。は。若。手。の
 感じ。小。生。は。お。金。然。イ。シ。ヤ。マ。グ。リ。セ。ー。ト。松。尾。氏
 けし。げ。う。く。小。生。と。カ。リ。セ。ー。ド。を。や。つ。て。いた。山
 田。氏。と。交。代。し。て。こ。い。又。す。げ。う。い。い。テ。ク。ニ。ツ。ク。ど。も
 あ。た。この。夜。を。乗。し。い。く。夜。だ。した。

今日付いよいよ登る。新谷氏はD云々を強
 張。本谷をトラバツて、沢を登りDと北屋の
 下正確にはDの下で一本。新谷氏予調で3.4
 のコルチリ廻泳ハ一人で行こうと云うけ山と
 結局北屋に新谷と佐藤。山田一松尾のスキー
 が取りつく事となつた。山田氏と松尾氏は北
 屋より西の山Dのオカ崎岸とか何とがオツ
 カない事をいっている。北屋はバツチリと雪
 が着き、ミックスがさあつた。新谷氏トツアで
 確實なるスキツアを切つていくが、氷が着て
 凍り付く事大変だ。コニタケトラインにきつて
 一ピツチ目までつまつた。Zピツチ目からは松
 尾氏トツア。カミンの石を抜ける事な事を
 やつて登る。本正直のところ、夢中であり詳
 しくは覚えていない。夏にはこんほところか
 と知っているのに、すいぶんシゴカれた事を
 けがら傷を残す。新谷氏が抜けたと云う
 ママ笑カ。た事も、新谷氏が抜けたと云う
 事の向いた鐘の鳴しが、在事。おは雪で埋
 つていた。山田氏のスキーは、Aのノルマル
 ころら、はホルトをスイスイ抜けて、ピルク
 に至つたのが、午後5時30分。取付が4時30分
 だった。ピルクからは、15分に登つた。北屋か
 らの時の自分の中に妙に、せうしく通り、松尾
 氏に見えた。昨年のもう、おは雪で埋つた下り
 た。A沢をグリセードで登り、マラフニとテ
 ントに戻つた。先文感と産感水同属する心
 の中、山田さん、お一本の時、おは雪で埋つた。

ミニクとは、お前と怪力、おは雪というききき
 自分よりおは雪から、おは雪というききき
 ① ↓

いよいよ下り、おは雪のネチンが売しい。おは雪
 松尾氏が明神の事、移は行こうとささ、まく山
 た。おは雪で満足してしまつた。おは雪は、おは雪
 乗りで、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪
 キリをやる。おは雪、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪
 リて、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪
 た。おは雪、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪
 より、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪
 下り、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪
 に、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪
 明神の、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪
 た。おは雪、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪
 今度、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪
 先昔、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪、おは雪

文三 佐藤

信濃路 ほとか 旅人の 瞳を懐かし
 懐り来り 十中城の園の 秋の日に
 悲哀日深く 流山なり 八尋年節

徳本峠

期間 6月7、8日
メニバー 上居谷 荒井

友人の最後な、最大な千ヨシボな山行はまたと有るまいと思ふ。最初の予定では、一日目徳本峠まで、二日目単念乗越まで、三日目一ノ天より松本へであつたが、二ピツ今あたりから尾谷靴ズレを気にしだし、又前日睡眠時間三時間なめてバラだす。ニス共やる気なく、休憩時間長くなり、本当にマル気が失くなり、終止めより二十分位の所でまだ一睡すべきなのに、ためてしまひ、しばらく火の近で遊ばせ、そして、いよいよ飯を作らうとする。ラジウスのヘッドが合ぬない。前日一生涯命点獲して、そろえたゆに、まう時ど山か入山かえてしまつたのである。それで飯は食えず、ビスケツトを食ひ、次の日からの行動をあきらめ下山した。あ、あ、最低だ。

荒井一記

8日 松本 556
テニ場 555
島々 1335
松本 1440

美ヶ原行

期日 6月9日
メニバー 今野(郵外者) 生原

(コース) 行きは三城を経て美ヶ原にでる。コリス、帰りは美鈴湖を経て浅間温泉にでる。コリス、全行程(徒)キスリニグへ本、毛布など(感想)を背負う。自分の体力のなさを強く感じ取つた。

針ノ木雪溪行

期日 6月9日
メニバー 井上 大川原 間瀬

榎太郎祭で日本中から赤青黄のメツチエンが交通信号がいろ位置てました。みんな軽装で、カワイクテ。手ツクステツポでフウフウ吹いて、峠へ出ると、レコードかガンガン。こども山ではなくなつた。ミトな乗しそんである。雪がガツボ有り、軽装のネエちゃんはおしりを出してかわいそう。でも雪が多いから、井上氏も大河原も乗しかつた。小生もグリセードがバガヤンて乗しかつた。

間瀬一記

美子原

期日 6月15日

メンバー 小川 佐藤 照井 市野 荒井 間瀬 西郡 深田 久弥 氏

扉邊泉から、道まらちがえて、沢をいでし
ごかれ、ヤツと深田氏一行においつく。どな
たかの手製の料理をゴチそうになり楽しく遊
歩、山登りは楽しきものなり、だけれど、うま
か、たじい

間瀬記

鉢伏山 & 高ボツ子行

期日 6月22、23日

メンバー 今野(部外者) 生原

行き(鉢伏山、高ボツ子まで)は、徒歩。
戻りの場合、高ボツ子から松本まで)は、バス。

前アルプス縦走

期日 6月22、24日

3日間天気が心配されたが、雨は全然降ら
ず、快適な山行ができた。や一日目、後本峠
までの道はやはり長かった。峠に着いた時
大滝山へ行く気全然なし。大滝までの道を長
かた。途中穂見台の景色だけが唯一の慰み
であった。穂見から大滝までは、残雪あり倒
木ありで難ギした。や二日目、朝まず小屋か
らの富士山が私達の前途を祝福するかのよう
に光り輝き出ていた。蝶ヶ岳からの景色も抜
群であった。天気は全く快晴、目の前に広
る穂穂の稜線、すぐ下に見える扇風の岩壁。
遠く衆鞍、御岳、南ア、富士、ハツの山々。
この景色に別れを告げ、単念岳へ。この登り
たはしでかかれた。思いの外蝶ヶ岳の下りが長
いのである。単念から大天井までは、蹴めも
よく、快適に歩ける道であった。大天井から
燕山荘と頂上との間のあたりで、ビバグ。や
三日目、燕から東沢衆越までは、残雪がゆ
道がわかりにくかった。東沢岳から餓鬼まで
も残雪が多く、道悪くいやな所だ。餓鬼は訪
れる人も少なく、静かなワウ山である。餓鬼
からの下りはとても長く、こんな所は二
度と来たくないと思ったけど。

常念岳よりS.T.入り

期間 8月15〜18日
又ンバー 宮田 他友人一人

15日 秋本 霧 朝のうち天候は良かた
が、10時頃少し小雨が降った。友人こ
えだけなので、のん気に一時間ほど昼寝をし
あまりゆんびりしすぎたので、蝶で行くの
を、常念で一泊、小屋着 235

16日 常念小屋着 霧で何も見えな
友人の調子が悪いのでゆくり登った。頂上
に着くと霧が段々晴れてき、稜高の方まで見
えるようになった。頂上着 230 昨夜の雨で道
は故郷の田んぼの様。蝶の頂上を出たの
が、川崎、騎期が運くてコバウケイ草の花は
見えなかつた。(残骸?が少しあつた) 大荒
小屋着 12時 小屋着 3人 控居る。他は誰モ屋
す。お茶 1230 登
吾林の 登んでいるときにうしろを
ら高枝の 木や。こいた。長野県代表の高枝
かや、マコたので、木の枝にこしがけて最後
まで固

17日 一日あがり後本で小屋の手伝い

ギマングルをや。大変楽しくおこしました

18日 午後後本を出てS.T.入り

宮田一記

八ヶ岳赤岳沢

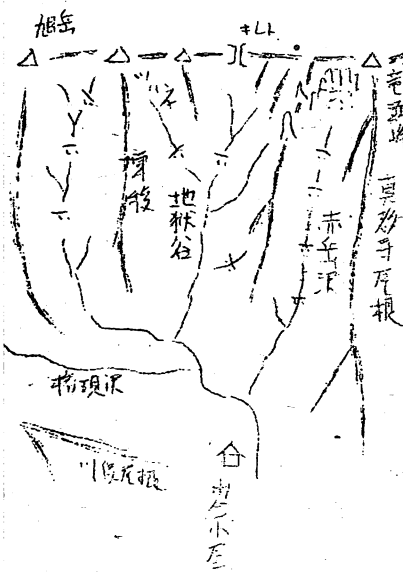
期間 9月23、25日
メコバー L 笠原 生原 栗田

22日 小海線からは、いろいろな雑誌な
どができた。エエ感じ。清里の駅で十分な休
息の後、地獄谷に向って歩き始めたけど、ち
いと道を違えてしまふ。少しだけ遠回りにな
ったけど、トツアを歩く生原君にしごかれ、か
なりいいペースで赤岳沢出谷に到着。

荷を置いておろ少し入ってみるつもりで地獄
谷の本谷に入ってみた。蓋をもつ大荒の寺前か
ら引き返す。今度はその枝沢であるカゲ沢に
入ってみる。これもちよいと入って引き返し
戻った。小屋は入でりっぱいなので、三人で
ツェルトを被って寝た。
(松本 5.12 清里 9.05 9.30 出谷 小屋 1235)

23日 快晴 赤岳沢に入る。ドブ沢を溯
ること四十分、や、とナメとなる。とにかく
水際には、先んじていたパーテイ(東京下水
道山岳会)の人々が取り付いていた。乾いて
いる右壁のすうすうをルートに取っていたが、
ミツテルの入が、もうちよりのところまで一か
がえもある石とアブミとともに墜落。ジメホ
こ!! うまいジツヘルでその人は何ともな
僕らは水際の右壁のすうすうにルートを求めた。

アブミを折って落ちたので、シヨリニガ
ニ本をそとに引出して直登。その上からは、オ
メと小荒の連続となつていて怖れり。この
上なし。技術的にキツな荒ばかりなので、思
切り登ることができた。ネジレの荒を登って
ぶと振り返ると富士山がくっきりと見えた。
もう真教寺屋根の牛首山と同高度だ。もう数
え切れないうちの荒を感してきた。沢のどん
づまりが見えてくる。半円形の真壁を形作
てゐる。先に向かっていたパーテイが見えなく
なるのを見計らう。これに取りつく。ルート
は右よりの草付だ。落石、落石、草付など
悪く感じだ。
真教寺屋根、主脈の登山者が見えるようにな
り、後鏡に到着。そして赤岳の頂上に立った。
一時間以上の人びりする。下山は天狗屋根に



(地獄谷概念図)

ル1トを逐ひ、二時間ほどで河原に降りた。
 た。夜は謎もリ方の小屋に泊った。

(出合 630 | 大汽工 910³⁰ | 稜線 125 | 赤岳 140 250 | 天
 狗尾根下 降点 310 | 出合 小屋 510)

24日 上の権現沢を溯行の予定だったが
 天気がよくなゆいで中止して沢敷となつた
 小屋の中で生原君の主筆権の下に三人して駄
 べる。栗田は約束のため昼より清里に下山

25日 笠原 生原は 北八まで縦走の予
 定だったが天気がおもしろくなく下山
 (出合 小屋 950 | 清里 1215)

栗田一記

裏銀より笠ヶ岳を

経て上高地へ

期日 9月22、25日
 メンバー L 荒井 居谷

9月22日
 松本 5:27 | 大町 6:30 | 7:05 | 7:43
 248 | 湯 9:12 | 三井 12:57 | 鳥帽子 15:00

9月23日
 小屋 6:30 | 三ヶ岳 7:24 | 野口五郎 9:02
 水晶 14:00 | 小屋 12:16 | 三俣山荘 15:00 | ニニ場 15:30

9月24日
 テン 10:00 | 三俣 12:15 | 双六小屋 14:50
 テン 10:00 | 三俣 12:15 | 双六小屋 14:50
 クリヤ谷 10:00 | 原頭 12:20 | 14:00 | 14:00

9月25日
 テン 7:30 | 検見 9:30 | 焼岳 11:00
 中尾 7:30 | 13:40 | バスターミナル 15:57

試験あけ、そして前日眼車をかいた為、ブナ
 立の登りはしんどかった。とゆうより、眠た
 くて、ソファで寝た。から登った。あんま
 りしんどいんと、帽子へ行くかはやめ、前高帽
 子で少し履き直した。屋合は本当に眠。こ
 まった。晩雨が降り、居谷をかきぬける。2日
 目、俺は常に朝早く、双六の手前まで行く予
 定を三俣のスタートアップ。景色はよく目の疲れは

日下しを依の疲山はいかんともしがたく
 思配だつたことあるが、日目、今日先
 へ俺はイヤイヤする。勝手なものである。も
 ともこの日も後の方は俺がバテ気味。抜戸
 と笠を登りてしにかれた。笠からの下りけ長
 口。2ピツチで水場まで来たがイヤな所だ。
 9日、2ピツチで検見温泉まで下る。後は
 急しく中尾峠までと思つたが又えらく
 遠く又又しにかれた。上高地への道も草薙で
 木立にイヤだ。イヤだ。それでもしんどか
 たらなるとか計画を遂行して来たことはまこと
 に喜ばしい。

荒井し記

北岳 バットしス

期間 10月16日 13日
 メンバー L. 井原 笠原 K. 内藤

10日 入山 元気が良くなる。熱が下山が
 ち、仕方のないか入山？ 甲府まで井上氏
 栗田君と同行する。励ましの言葉を聞
 て別れる。広河原まで秋霧の中をバスにゆ
 ける。3ピツチかけて大滝。二俣の少し下
 にBCを張った。6入用天幕に二人はとも
 広すぎる。OBの奥島、小川さんが、すぐ判
 断に立派な(?)ギヤを張った。有人で
 も東京からクレーンで来たをうた。早速コ
 ーをいたたく。OBの活動は現役にとら
 ぬことである。チニタライトのうちに
 入山終わり。
 (松本 910 → 甲府 11:30 → 広河原 13:50 → 二俣 BC 16:00)

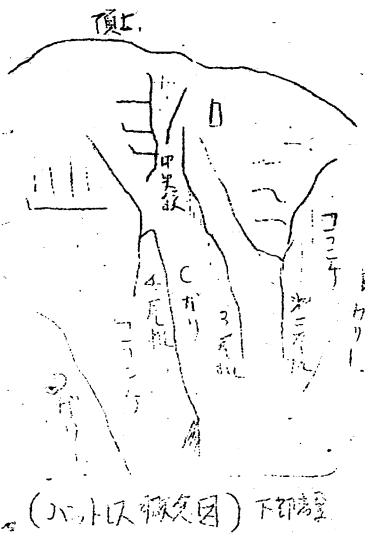
11日 第三尾根登攀 朝のうち天気悪く、
 すこし出発を見合わせる。ガスの上へ晴れて
 いるような感じなので、また最初だから下降
 ルートとしてこの偵察を兼ねて五尾根を登ら
 うという事になった。天幕から見てみると
 どうやらOBの方道も出発するらしい。一
 路に行く。流れ込む沢を数えながら、ここぞバ
 ットス沢と思ふところで小休止。をした
 後から後から他のパーテイが続々とこ
 へた。バットしス沢をつめ、A、Bルンゼの中

脚を登る。天気が良くなる。O.B. パーティー
 は一回尾根に向う。この際、バットレスの中
 心に登って少しでも滑れようと三尾根に変便
 C. ガリーを少し登り、末端から取り付く。ほ
 とんどアツシニ途中と最後の方が岩で傾斜
 はかなりきつり。バットレスは予想外に小柄
 てC. ガリーをばさんで目の前が中央核、すぐ
 とガリーのルートを登っていろ感じ。しかし明
 るく。岩は硬く、またの西風が当るなつので
 岩場としてはとても快適な所だ。ルードも初
 心者向きから上級向きまで、沢山ある。さらに
 あまり電くらぬな。入のいなりときならは
 とでもよりの岩場合宿地である。北岳頂上でO
 B. P. G. R. T. Y. とポイント。一諸に八本衝のゴル
 ガラ下る。夜、ホコンパ、内藤氏が入山
 (T. S. 725 パソトレス沢出合 845 オ三尾根取
 り付き 1000 終了 1250 北岳頂上 1350 1440 T. S. 1540)

12日 第四尾根、O.B. の方達は、オ一尾根
 を登りすぐ撤収して、今日は途中の温泉に泊
 るとのこと。やはり一諸に出掛り、写真ず
 いぶん撮った。緩傾斜で利かぬ。今日は
 赤晴、うまい傾斜、4尾根取付でアンザイレン
 (元トのとりようでは2こ、4上までノイザ
 イルでいける。ケント内藤、ヨタロの順序
 で登る。色々快適、しかし予想外に傾斜は中
 るく高反はあり感じない。マツチバゴまで
 快適に登る。おきに採りめる岩場だ。コルへ
 のマツチバゴ、アンザイレン、オ一尾根、コルへ

中央核と目前にみえから登る。O.B. パーティー
 終了している。中央核は全く写真から受ける
 スケール感がない。ハングこそ大いだが、人
 5、6人取り付いていること、さう聞かぬ。人
 2人でトツプを井肉に交代。二ピッチでハイ
 マツ帯に入る。ここからピクまでがさよ
 とあつた。今日も御池廻りで下る。最初の目
 的は達成。明日は、オ一尾根を登ることにする。

13日 下山 未明には晴れているが、その
 うち雲がでてきた。南から天候変化の気配に
 ある。しばらくして登野はやめることになり、
 直ちに下山。撤収し、歩きたすこと、雨かパ
 ラフク。判断がよか、たなど、気がかりなから
 原河原へ入山するパーティがかなりあつた。
 うまくバスに乗り、甲府で雨に急行
 て帰る。辰野で別れた。一人で松本へ。松本
 は快晴。山の寒さと山を全く、ついで暖かか
 た。(大樽沢 B. C. 650 原河原 840 甲府 1011 松本 1121)



(バツトレス撤収図)

オ三尾根 K. T. 記

第1の瀬・沢・流（キ）

10月13日

佐藤 研二 主筆 生原

「感想」

水が登りだしたのが千呎近くだ。長巻で、
途中で跳くなり、少くも千呎の意味で、
（？）

生原一記

※編集 制作後記※

本誌の部員、松本部室の活動をするべし
録せんと思へどもその豊厚し。結局一年生
を以て松本部員を中心に合宿外の山行を策
めて、非公武ながら個人山行報告集を編んで
みた次第です。他にさうくつか山行か行の中
をいさはずすが、元稿がないことと調査不
足のため載せられませんでした。次の回はほ
さらには充実したものを作りましょう。（兼田）

風吹大

10月19日 20日

宮田

19日 北小谷登山 鞍高の山岳部の後から
トコロコロとついで行。途中から雪が出
てき。上に着くと十五分程雪があつた。風吹
大池着 15:00

20日 起床 3:00 鞍高は 600 頃出発したが、寒
い寒いとソエルトの中で本エーブス支たいて
八時まで寝ていた。ブクがなくなつて相池の
方へ行くのをさやめた。9:00 北小谷に向つて出発
北小谷着 12:00 北小谷の方まで行りは良かった
ズク出して相池の方まで行りは良かった
後で少し後悔しました

宮田一記

岩登リトレニング

4/20	厩所	佐藤 (A.R.L) 笠原 (ケン)
1/21	物見岩 <small>合宿</small>	佐藤、長野部員全員
1/26	〃	佐藤、笠原
5/21	厩所	佐藤、笠原、難波 (元部員)
1/26	鳥帽子岩	S.A.C. 主催 1年全員、I.M.N. 各部員
6/8.9	物見岩	草野、栗田、齊藤 (N. 駒井、井原 和)
1/16	〃	荒井、市野、草野、岡瀬 (N. 多数)
1/20	厩所	笠原、難波
1/27	物見岩	佐藤、笠原、難波
1/29.30	〃 <small>合宿</small>	金井、齊藤、宮田、N部員全員
7/13	猿岩	栗田、I. 佐藤 (元) 井南
9/22.23	物見岩	岡瀬、N. 吉野、井口
10/15	厩所	笠原、大河原、草野、栗田
1/19	〃	市野、栗田、N. 大野
1/27	〃	荒井、小林、N. 大野
1/28	物見岩	荒井、生原、N. 吉安、大野、吉野、井口

南アルガス南部縦走

8/6 58/9 佐藤正敏 (G.R. 1 若の単独行)

縦走がトランブルの為 三休より下山してしまいい
峠より見た南部の山々がせせり出しすゝまに
登してしまつた。

8/6 寺澤氏と二人で始発のミスえに乗り

込んだ。前夜寝るのいのかこたえる。寺澤氏は
伊那で下車。山はは大島で下りるはずが
寝こんでしまひ 気がついたら 飯用であつた。

向やカトヤで 橋る 鹿塩 は差いたのがに
時頃 20ピッチで塩川 せいせいを通り越

しまつた。三休時についてのが午後5時30
でした。晩飯はカツホリ 合おうと思つた。飯

ごう一ツ作ったが 半分も食えなかつた。ミラフがは
くセルトもなく 寒かつた。

8/7 峠も 40 に出た。朝飯こそはと思ひ モルゲン

をブニン入の音が ちと強烈すぎて 目が変に
つた。前を大塚山岳部として すごい人達がす

まゝ 勢いよく ぼして行く。スゴイニネ

途中がスで面白く 行つた。赤川岳の登りく ところ

した。赤石は マニコラニコと越す。百軒平で ぶか
番帳 百軒洞で 道を ぼかえ 戻つた。ウサギの小屋のと
ころで 雨が降り始めた。 さんざん 迷つたあげく 聖を越す
事にする。雨の中の 聖の登りは 大変 大変であつた。

この道が この道と 意地になつて 登つた事を ぼかえ
こいる。ペーウに 迷つた時 何と云え ぼかした
すべる道も おさる おさる 聖子の 小舎の 着いたの か

午後 6 時 30 分であつた。小舎に入ったが 実に ロハで
うまかつた。もう モルゲンは 食えず。お茶漬で こと
て あつたの 30 ピッチ

8/8 5時 発 ブニンと 歩く お花畑は きれいな 程 歩く ば
かつた。

高に さいいた 創木も きれいな 程 ではない。光岳の
テニ場は 最高。一週間の 寝ていても あまのい のい じゃ
何い なるか、一時 同林み とも おきの ミカニの カニス、
食べた。予定の 大無向など 全然 行く 気になら ず 太平洋

く 泳いで みたく くり 釜谷へ 出る 事にする。地下 足袋
ひかて 足に ママ 出来 すぎ さい シゴキ であつた。

地図 一枚 ある けど 狭ま での 軌道は 大分 あり ぼか
近いうち 車か 入ると こと したが 小住は ビッコを ぼか
ひか 歩いた。長かつた と ぼか 長かつた。コト 狭着

午後 8 時 30 分 飯を 食おう として 食堂に 入つた。ど ぶ かの
グロい い X 干公が いた。ビール と びら。共 恋して 夜 終
から ベイトに 来た。ま だ ぼか ぼか ぼか ぼか ぼか ぼか ぼか ぼか
は 6 本と ぼり 金か びく ぼか ぼか ぼか ぼか ぼか ぼか ぼか ぼか

車の中へ乗る

8/9 一帯のバスでも出発 金谷までの軽便鉄道がいい
ものでした。松本までのキップをかたがし妙円しが残る
ひく不安にふる。井又島で下車し海水浴。一入は
面白くネエ 疲れが出るのか豊橋は眠って乗りす
ぐし方方屋に近くなりだが又豊橋まで戻る。松本車
の中はけ美女がいっぱい 松本をけチャウネ
午のト二行で松本に着いたのは11:30頃 5555
考えさぬぐれた山行でした。

黒川上郎下

8/25 ↓ 8/29

O.L 寺澤三男 川 佐藤正敏

8/25 寝ほうして入山 いっそのこと 針の木峠ナリ
平の小舎(ヒタリ金)

8/26 沢渡 船に乗って遊ぶ 黒田マールの船
長さん本 前下りして絶好な景色をみることができた

8/24

とにかく行ってみる事になる。東沢ナリすぐに渡
の連続 本流は水音が有り結構どこかあやういぐ
いた。水がザラザラとこぼれ落ちてはけると 身体が
浮いた。お湯をつたりして行く

2階イヤラマイ へつりがめる 山下の生合
でキヤノ

少時 少時 少時 少時

8/28

40回ある みるみる水音がふる

山トカウ 一川位のとこまで来る 不安に
なると 濁流のトカウサにまぎれて岩を
アキアキを さらさら

そのすがい流れた

8/29

水が多く あまらぬ 高天原新道より
黒田に本でしけし ぬる後 金をかどえ
バスに乗る 下後之山の西積可サ
らしい。ヤット 黒田のオオアキチンに合点する
夏の山行は全て終了。

(夏 GR)